

第八十六号

柳井市白壁の町並みを  
守る会  
事務局(皿田治)  
TEL:090-1012-4204

町並み資料館に七楽人がやって来た

事務局長 皿田 治

今年もおひなさま巡りの季節がやって来ました。もう二十一回目となるんですね。二月一日に六組の七段飾りを設置するため町並み資料館にやって来たのは、ふた昔前にはまだまだ紅顔の美男美女だったが今や厚顔のおじいさんとおばあさんになり変わってた計七名。それから当初よりお手伝い頂いている柳井商工会議所の職員さん男女二名。いつもありがとうございます。若いっ

ていいなるとつくづく思います。さてその町並み資料館に新顔が加わりました。ほとんどの七段飾りには五人囃子がいます。五人衆に琴と琵琶の奏者が加わった七楽人のいる七段飾りセットです。柳井市在住の中下哲夫様より寄贈された昭和五十六年のおひなさまです。珍しいのでネットでも調べたにわか知識によると五人囃子は能楽の奏者、七楽人は雅楽の奏者を指すのだそうです。

実は当会事務局には一年間に二、三度おひなさまを寄贈したいとの申し出があり、これまでは丁重にお断りしてまいりました。大

変りがあるからです。通りか場所と保管場所の確保の問題が展示場所が見える民家や商店には既に参加していただいております。その上、七段飾りともなれば梱包材も含めれば相当な容積となり、しかも一年間その場所を取っておかなければならない。決して容易なことではないのです。

今回はなんと町並み資料館の職員さんが資料館内でスペースを無理やり空けられお引き受けすることが出来ました。これまでお申し出いたできなかったお断りせざるを得なかった多くの皆様方にはこの紙面をお借りして心よりお詫びを申し上げます。

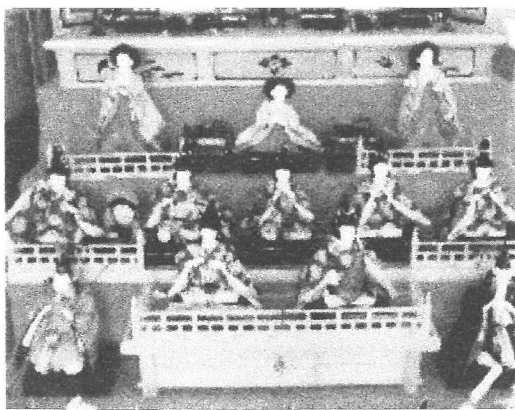
町並み資料館の休館日(月、木)に設置、片付けを行う関係上、おひなさま巡りの開始日と終了日は毎年若干変わっております。今回は事務局の怠慢(僕のこと)で参加されるかどうかの事前確認を怠ったため新聞報道で初めて知ったとお叱りを受けました。申し訳ございませんでした。以後気を付けます。

当会の実施しているおひなさま巡りは山口県内ではかなり早い時期に始めたのですが、近頃では多くの市町村が参加し特に後発組は報道機関にいち早く取り上げてもらう必要性からかどんどん開始日が早くなつて来て当会としても約二カ月の会期となつて来ております。

今年は一店舗移転に伴い一カ所展示場所が減りましたが、新たに「やないろ」さんが参加され昨年通り二十四カ所を実施する

予定のところ重枝醤油店さんのおひなさまを飾るひな壇が破損し修理不能となったため参加が叶わず実際は二十三カ所での展示となりました。

コロナ禍で多くの行事が中止を余儀なくされる中、継続できたのはよかったです。中止に伴い一日限定のウォークラリーは中止せざるを得ませんでした。転んでもただでは起きないのが当会のよいところです。木阪会長の決断で花香遊での展示を予定していた柳井中学の絵画クラブの生徒さんたちの作品を白壁通りにおいて展示することに協力することになりました。展示箇所は町並み資料館、やないろ蔵として白壁通りに位置する民家と店舗十一カ所。期間は三月十三日から二十一日までで約一〇〇枚の絵画と生徒さんの制作意図の説明文章が実名入りで展示されました。



七と会議所の紅一点。毎回のことながら今回忘れていた組み立て手順がまた次回分からなくなるとは違いますのであります。あく情けなや。

## 町並みかわら版事始

（さらば、町並みかわら版）

事務局 國森重彦

平成十二(二〇〇〇)年四月から二十一年間(途中病気のため二年間休刊)、本紙の編集に携わらせていただきましたが、今号をもって編集の仕事から引退させていただきますことといたしました。昨年の総会において、ほぼ同期間当会会長を務められました佐川有信氏が引退されるなど、五分の一世紀の期間を経ますと、「代替わりの時期」になるのかもしれない。この間、本紙をご愛読いただきました会員および関係者の皆様にお礼申し上げますとともに、本紙の目玉というべき「連載」にご寄稿いただきました故福本幸夫先生、会員久保淳史氏、故金子佳孝先生、松岡睦彦先生、故日下章氏、岸田稔明氏、松島幸夫先生(以上寄稿順)に、この紙上をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。

私事で恐縮ですが、思い起こしますと、平成九(一九九七)年四月に会社を退職して故郷柳井に帰ってきて間もなく、地元のみちづくりの会に温かく迎えられ、既に柳井市白壁の町並みを守る会(以下当会)が存在することを知りました。その前年に当会の会長に就任された皿田治氏(現当会事

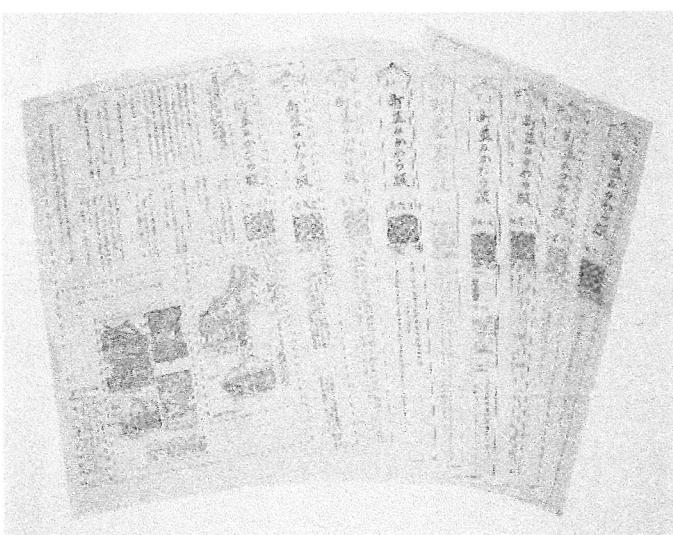
務局長)も当会の再活性化を通じてまちづくりと取り組むことを考えておられましたので、私が事務局長に就任し、具体化の検討に入った次第です。まずは会員の親睦を兼ねた先進地視察として平成十一(一九九九)年四月に筑後吉井町に旅行(これが二年後の当会おひなさま巡りに結び付く。また以後平成二十七年までほぼ毎年視察旅行を実施)、七月にしらかべくもの巣取り(のちの七夕祭)、十二月に年末夜回りを実施しました。こう振り返ってみますと、現在も実施している当会の年中行事の多くが再スタートの時期に始まったことは印象深いものです。

こうして当会として実施する諸行事を会員に予告・報告し、また、外部に広報する手段として、会報の必要性に目覚め、発行の検討を開始しました。その結果、そもそも当会の設立には柳井市教育委員会が深く関与(むしろ音頭取り)され、それまで当会事務局は教育委員会に置かれていたこと、当時柳井市が主体となって文化庁と白壁の町並みの重要伝統的建造物群保存地区選定に向けて交渉が進められていたこと、その交渉の状況及び柳井市が制定すべき保存条例等のソフト面、地元が協力すべき環境整備等のハード面について、住民側に周知すべく「町並みかわら版」が発行されていたことを知りました。

その第一号は、奇しくも選定のちょうど一年前、昭和五十八(一九八三)年十二月

二十日付でした。続いて、第二号が翌年一月二十日付、第三号が同年三月一日付、第四号が同年五月十四日付と続き、昭和六十(一九八五)年四月五日付の第八号において前年十二月十日付官報で選定が告示されたことが知らされました。なお、教育委員会には上記以外に昭和六十年十月二十四日付で発行された第十号が保存されておりましたが、第九号については遂に発見することができませんでした。なお、以上の町並みかわら版各一部は、私が保管しており、今後は記録のため保管すべく事務局長に渡す予定です。

(以下次頁に続く)



【柳井市教育委員会発行の町並みかわら版1～8号及び10号。B4サイズ片面刷。事務局保管。】

(前頁より続く)

前置きが長くなりましたが、以上の調査結果に基づき、再発足した当会の広報誌も「町並みかわら版」とすべく、号数についてはいろいろ悩みましたが、遂に見つからなかった九号からの復刊とすることを私一存で決め、平成十二(二〇〇〇)年四月十五日付で、季刊Ⅱ年四回の発行の方針の下、編集・発行を開始したものです。

記念すべき復刊第一号(第九号)には、一頁目に河内山哲朗前柳井市長と皿田治会長(当時)との祝辞を掲載しましたが、お二人の顔写真の若々しさが印象的です。また、二頁目には、当時話題になり始めたフワフワランドの候補地として、白壁通りとの回遊性を考慮して三ヶ岳・琴石山麓にするよう、長谷川県議(当時)に陳情書を提出したり、柳井市中心市街地活性化協議会に提言を行ったりしたことがまとめられています。これらの陳情や提言に当たって発揮された故武居哲夫会員の幅広い人脈、情報力、企画力には驚嘆させられたことが思い起こされます。

また、復刊第二号(第十号)では、この年の定時総会で佐川有信氏が新会長に選任されたこと、同氏の若き頃の写真と共にご挨拶が掲載され、また、故福本幸夫先生の

連載が始まっています。

こうした当会の活動を記録した町並みかわら版のバックナンバーは、上記一号から当八十六号まで、一部ずつですが事務局で保管していますので、興味をお持ちの方は皿田事務局長までご連絡ください。

今後の当会の会報については、木阪新会長がこの方面につきご造詣が深いことでもあり、事務局長と相談してお決めになるでしょうから、楽しみに待ちたいと存じます。私自身は終生会員のつもりですので、今後もお付き合いよろしくお願いいたします。それでは皆さん、さようなら、さようなら、さようなら！

鬼の編集長殿

永年のお仕事ご苦労様でした

事務局長 皿田 治

よく車のハンドルを握ると人が変わる方を見かけますが、國森さんがペンを握ると全く同じことが起こります。これ本当です。我々編集長の元で印刷を担当している印刷部員の間では彼は鬼の編集長としてそれはそれは恐れられているのでした。

まず次号の内容は何を取り上げるか大まかな指針が示される。次に誰がその記事を

書くのか？写真はどうするのか？原稿の文字数は？などなど矢継ぎ早に指示が出される。ここで締め切り期限に遅れようものならば大変な目に合うのです。鬼と化した編集長の怒りの筆が提出した原稿に入り元の原稿は無残な姿に！とまあこれは冗談ですが、なにしろ元柳井高校の新聞部の部長さんであった方ですから我々はビビりまくったのであります。

前回がそうだったのでですが発行日の一月十五日によく印刷が間に合いやれやれと思いきや翌日メールにて「まだかわら版が届いていないがどうなったの？」との問い合わせ。費用の関係で分担してポストイングしているため〇〇さんが届けるはずと返答。その後数日待っても届かないので、常置している町並み資料館まで取りに来られた由。

原稿提出期限だけではなく発行期日にも厳しいのであります。八六号までつつがなく続けて来られたのはひとえに鬼の編集長殿の能力と執念のお蔭です。本当にご苦労さまでした。

そんな訳で鬼の編集長殿の後任を誰に任したらよいのかそれが喫緊の課題であります。木阪会長の手腕に期待することといたしましょう。



# 商都柳井の歴史 その十六

松島幸夫

## 柳井津の経済発展(九)

### 重厚な白壁の町並み

今回は、柳井津町の屋敷区画や建物の特徴について考えてみましょう。

#### 一 屋敷地の区画

柳井津の白壁の街並みは、街路の両側に短冊状に屋敷が並んでいます。いわゆる「ウナギの寝床」です。堂々とした土蔵造りの商店が建ち並び、整然とした区画に見えるため、江戸時代に都市計画がなされたかに思われますが、自然発生的に形成された町並みです。

屋敷地と道路の境をなすラインを見ると、屋敷ごとに入りがありません。見渡すと直線ではなく、凸凹をなしています。都市計画ではない証拠です。



また溝の石垣を見ると、長い期間にわたって順次積み上げたことが判ります。地上げの度ごとに室町時代の溝の側壁を

高くしていき、現在に至っているのです。土地所有者は栄枯盛衰によって替わった場合もありますが、屋敷地の形は室町時代からの区画を踏襲しています。もちろん、柳井川の護岸工事によって川縁の土地は拡張をされています。

#### 二 街路からの建物外観

道路に面する主屋は、多くが妻入りの二階建てで、上層に商品を格納し、下層を店として売りに使っています。白い漆喰を厚く塗り込んだ土蔵造りで、屋根は平瓦を丸瓦で押さえた本瓦葺きにしています。間口が狭いながらも、奥行きを長さを感ぜさせる堂々とした構えです。壁の白と瓦の黒が際立つ清楚で重厚な景観は、柳井津商人の実直さを表しているかのようです。

前面の上層にはあまり大きくない窓を一對設置し、防犯のための鉄格子をはめて、防火のための土戸を取り付けています。火災の際には土戸の隙間に味噌を塗り込んで、完全密封をしました。

前面の下層には本瓦葺きの庇を付け、店頭の開閉面は蓆帳(ぶちょう)にしています。蓆帳とは、上部板を跳ね上げて釣り、下部の二枚の板を抜いて全開放する構造です。寝殿造りの蓆戸(しとみど)と同じ構造です。現在のシャッターにあたります。昼には全開をして商行為をしました。

店の出入り口は、跳ね上げ式の大戸でした。商品に乗せた荷車が出入りするので、広い開口部が必要でした。大戸には小戸が設置してあり、夜間の出入りは小戸を利用

しました。火災の際には蓆帳と大戸の前面に土戸を閉めて、類焼を防ぎました。

#### 三 瓦葺き建物の創建時期

柳井津町の豪壮な土蔵造りの街並みは、蓄財の成果でもありましたが、それ以上に防火対策のためでした。

幕府や藩は庶民の蓄財や贅沢を禁じており、当初は農工商の家屋に瓦を使うことを禁じていました。しかし人口が密集する江戸や大坂などでは町の広範囲を焼き尽くす大火が発生します。大火が起こると、膨大な富が失われました。世情不安を引き起こしました。

柳井津町でも、同じことです。江戸時代前半は、どの商店も板葺き屋根でした。瓦の使用が許可されたのは享保(一七三〇年前後)と言われています。

国の重要文化財である国森家住宅は、明



【土蔵造りの街並み】

和五年(一七六八)暮の大火直後に建てられ、建造当初の構造・様式を良好に伝えていきます。

# 資料館便り

## 『希望を持ってば』

副会長 山近絹代

一年前の本欄で、「松島詩子の名曲を歌う会」の延期と秋ごろの開催希望を書いたが叶わず、のみならず今春もまだ開催できない状況になっていないのは残念だ。昨年の会の来られることになっていった松島さんのご子息から「開催の際には連絡を」と言っ

て頂いているが、早くその日が来ることを願うばかりだ。

白壁通りの金魚ちようちんが十一月に外されたので、おひなさま巡りの頃には帰ってくることを願っていると、その通りになった。二月以降、多くの方が金魚ちようちん目的で来街されている。若い時にパンフレットで金魚ちようちんを見て一度行ってみたいと思つて来たといわれる東京からの男性、やはりパンフレットを見て来られた大阪からの若い女性、ガイドブックの写真に魅せられて途中下車された埼玉からの女性、など遠方の方が多かったが、県内各地から撮影目的で来られた方も多く見られた。

この春、当会主催で柳井中学校生徒の美術作品展が町並み一帯で開催され、当館では「マイ故郷ポスター」展があり、二十二

枚が展示された。日積、大島の子供たちは神楽、ぶどう、鯛などを描いていたが、柳井小出身の子は、柳と井戸、白壁の町並みを描いている子が多く、半数以上の子が金魚ちようちんも描いていた。この子たちは、生まれた時から金魚ちようちん祭りがあり、小学校で金魚ちようちんの制作体験をするし、特に昨年は、金魚ちようちん再現プロジェクトが学校であり、「マイ故郷」として思うのは「金魚ちようちん」なんだなあと改めて感じた。

北海道からはこの一年来られていないが、そのほか東北から沖縄までの方にご来館頂いている。コロナ禍で来て下さるのは本当に来てみたいと思つて下さる方々。「町並みが美しく感動した」、「なんてステキな町、こんなにゆつくりできる良い所があるなんて」。皆さん嬉しい感想を言ってくださっている。有難い限りだ。

春休みになり大学生も次々に来られた。「今回、西日本の伝建地区を巡っている」という東大生と大盛り上がりで話した。すると一週間後に、その方とクラブが一緒に柳井の話聞いたという方が来られ、話が弾み、写真も撮ったりした。皆さんの旅の思い出にちよつと参加させてもらえ、何と楽しいことか！若い人も訪ねてくれる町並み。希望が持てる。

四月の新番組のドラマのセットの中にも金魚ちようちんが飾られている。ふるさと納税の返礼品という設定のようだ。大活躍の金魚ちようちんさん、ますますがんばれ！

令和2年度第4四半期及び  
同年度年間 町並み資料館入館者一覧

	R3/ 1-3	R2/4 -R3/3	R3/3末 現在累計
町並み資料館			
入館者数	2, 717	10, 179	287, 054
前年同期比	65.7%	43.7%	
松島記念館			
入館者数	640	2, 662	106, 285
前年同期比	50.9%	42.5%	

### 【編集後記】

・4月12日より6都府県に拡大して「まん延防止等重点措置」が適用されます。何か対策が後追いになっているように感じますが、感染者数の推移グラフを見ていると、各知事が緊急事態宣言解除の決断を下した理由は理解できます。他方、医療専門家がリバウンド～第4波を恐れて警告していたことも事実ですが、

・ワクチンも、当初の目論見通りの入手が難しくなっており、低感染地の柳井地域まで回ってくるのはまだまだ先の話のようです。地方から大都市圏の感染状況を見ますと、特に若者が1年を超える締め付けに我慢が出来なくなっており、基本的な感染対策さえ無視し始めていることが伺えます。私たちは、ワクチンに頼らず、これまで同様、マスク・消毒・換気・三密回避等の基本を守って、感染を拡大しないよう心がけようではありませんか。

・この1年余り、本欄もコロナ、コロナで過ぎました。本紙2～3頁に書きました通り、本紙もいよいよ最終号となりました。つたない編集でしたが、その時、その時の話題はお伝えしたつもりです。皆様のご健勝をお祈りします。  
(事務局 國森)